

う つの みやま とうじん えんべい はなし  
10 宇都宮明神援兵の話

伝承地：馬場通り1丁目



(二荒山神社)

参考書籍：4・5・7・8

平安末期に藤原宗円が宇都宮に土着し宇都宮氏の始祖となってから500年余が過ぎた天正年間、22代城主国綱は南からは北条の大軍、北からは那須勢と激戦を繰りひろげた。

この物語は、そのような状況の中にあつて宇都宮氏が二荒山神社の社務職を兼ねており信仰心が厚いために常に二荒大明神の加護の中にあつたということを示したものである。

北条氏は早雲、氏綱の二代にわたつて

伊豆・相模を討ち従え、さらにかねて異心のある宇都宮氏を征伐して奥州までもおのが軍中におさめようとしていました。

天正17年早春、宇都宮征伐につき軍馬の評定を開き、同年4月17日北条氏直の名代、北条左衛門を総大将に1万5千余人が小田原を出発しました。このことを早くも知った宇都宮国綱は「笑止に堪えざる北条の者共かな、一あわふかせてくれん。」とばかり、手兵わずかに6百余騎を率いてこれを雀の宮辺に迎え討ち、奇計をもってさんざんに北条氏をなやました。しかしかつては宇都宮家の紀清両党一方の領しゅうとして知られていた芳賀伯耆守が北条軍にあり、營れの勇士としてただ一人切り込んできたので、宇都宮勢は総くずれとなりました。この時、不思議にも宇都宮城の方から神風が起り、白衣の社人約百名が現われて宇都宮軍に加勢し、手に手に御幣を持ち、勝誇った北条軍になだれ込んでいきました。この勢いにはさすがの北条軍も総くずれとなつてしまいました。

大明神の援護によって敵を敗退させた宇都宮勢は無事帰城することができました。しかし不思議なことにこの時、宇都宮大明神の扉は末社に至るまで全開していたのでした。しかも、神前の幣はくには鮮血がにじみ、神馬は大汗を流して疲労の体でありました。さてこそ宇都宮大明神の御加護であつたかと、城主国綱も神の威力に深く感激して感謝のしるしとして、神馬と太刀とを奉納したと伝えられています。

天正18年、国綱は豊臣秀吉の小田原征伐に出陣し、その功により羽柴の称号を賜わり所領を安堵されました。しかし、間もなく秀吉の勧めた養子縁組の話を受け入れなかったために、怒りにふれ、宇都宮城並びに所領を召し上げられ、宇都宮氏一族は総没落の悲運にあいました。

